

通信表のデジタル化（つたえる）

1. はじめに

CMIとして、学校にPCが普及し始め、先生方の起案文書等にも、手書きがなくなっている現在でも、通信表だけは相変わらず、手書きで作成している学校はまだ多い。しかし、通信表をデジタル化することによって、訂正が簡単になり、清書する手間が省けることによって、子どもと接する時間が今まで以上に確保することができる。ここでは、実際に通信表をデジタル化している小中学校の例を紹介する。

2. 改善された点

(1) 時間的なこと

デジタル化によって、教員の通信表の作成にかかる時間が軽減され、部活動や学習指導、または教材研究等に関わる時間が増える利点が考えられる。

(2) 入力について

通信表は、下書きをして記述内容や誤字脱字を訂正してもらうというプロセスを踏まないといけない。デジタル化されると手書きに比べて訂正が非常に楽である。また清書する時間がなくなるので、時間的な余裕ができた。

(3) データの共有

先輩や同僚の先生方の通信表を参考にしたり、去年のデータを参考にしたりできるだけでなく、住所、氏名のデータや成績のデータ等を名簿作成や成績通知票等に利用することが可能になり、汎用性も高い。

(4) 予算

これまでは、通信表の印刷を業者に委託する費用を毎年予算に計上していたが、デジタル化によって自校で印刷可能になり、予算的にも節約できた。

3. 配慮を要する点

(1) スキルアップを図る

通信表をデジタルで作成することになると、教員全員がエクセルについての基礎知識及び、入力の仕方についての共通理解やスキルアップが必要になってくる。夏休み前の校内研修等を利用して、エクセルの使い方や関数の意味等を理解する必要がでてくる。

(2) 確認・訂正のチェック体制を確立する

手書きだと、担任が生徒一人一人転記しているが、デジタル化されると中学校の場合、クラス単位や教科単位でデータを動かすことが多くなる。それにとともに生徒のデータの入力ミス招く可能性がでてくる。確認の段階でチェック体制をきちんとし、表記ミスや転記ミスを未然に防ぐことが大切である。

(3) 所見について

所見については、文章の推敲が簡単に行えるので、文章の質を高めることができる。それから、デジタル化によって、所見がパターン化することがあるので、子の特性を適切に評価することが大切である。

4. 保護者、教員の反応

所見が活字になることにより、保護者より「言葉が冷たく感じる」等の意見が出てくることが予想されたが、そのようなことはほとんどなかった。

教員からは、清書する時間がなくなるだけでなく、訂正等も容易に可能なので好評である。このことによって生まれた時間を、放課後の補習や部活動など児童生徒と向き合う時間に利用したり、次時の授業の準備に生かしている。